

## キャリアパス委員会報告

### 1. 第46回日本分子生物学会年会に関連して

#### (1) 演題発表者の属性調査について

今年もオンラインで年会参加登録手続きをする際の最初に行うユーザー登録画面に属性調査項目を設定し、研究者の属性に関するアンケートを行いました。ご協力ありがとうございました。このデータ全体としては年会参加者の属性を示すものですが、本委員会では継続して行っている経年調査の形に合わせてここから演題発表者等のデータのみを抽出し、集計を行いました。結果は学会ホームページへ公開すると共に神戸年会会場でポスター掲示・チラシ配布いたしました。この会報にも掲載しています。

#### (2) 年会企画

近年博士後期課程に進学する学生が減っていることなどから、委員会の目標として「『若手』のサイエンス離れからの脱却」を今期掲げました。そのアプローチ方法として2023年の年会企画は「博士号を活用して、楽しそうにキャリア形成や研究をしている人たち」を知ってもらう機会にしたいと考えました。博士後期課程への進学をしたくない、あるいは迷っている学生にとって具体的に何がボトルネックになっているのか、そして様々な課題がある中で博士号取得者の人々はどのように乗り越えてきたのかなど、皆さんの生の声を集めて情報を共有し、議論する場としました。

年会企画は年会初日・二日目のお昼にPart1「事前アンケートから考える：人生の選択肢を増やすためのPh.D.」・Part2「博士についてのお悩み解消！～Ph.D.の価値と可能性について～」の二部構成で行いました。企画会議を重ねるうちに、恒例となっていたセッション中の話題提供的なりアルタイムアンケートを今回敢えて事前に用意せず、両企画とも参加者の皆さんには最初から最後までコメント投稿をお願いすることになりました。その結果、双方向コミュニケーションツール「Slido」を使って様々なバックグラウンドの方から多くの投稿が寄せられ、非常に盛り上がりました。Part2小林武彦氏の講演に加え、第一線の女性研究者であるPart1の甲斐座長、Part2の佐田座長に場の采配だけでなくご自身の経験を率直に語ってもらえたことも、参加者の皆さんには強く印象に残ったようです。

各セッションの詳細は座長報告を、また事前アンケートの結果やセッション中に参加者からいただいたコメントは学会ホームページに公開していますので、ぜひご覧ください。

<https://www.mbsj.jp/admins/committee/careerpath/annualmeeting.html>

### 2. 男女共同参画学協会連絡会（連絡会）からの退会について

分子生物学会は連絡会設立当時から正式加盟学協会として活動に参加し、2018年にはオブザーバー加盟学協会へ移行して連絡会への協力を続けてきました。しかし2023年11月までに正式加盟への再移行あるいは退会の選択を余儀なくされ、検討の結果本委員会より理事会執行部へ「退会が望ましい」との答申を行いました。理事会執行部の賛同を得て理事会でのメール審議が行われ、7月25日付で承認されました。9月1日付で連絡会へ退会届を提出し、連絡会の年度末となる2023年10月末をもって退会の受理を確認しました。

分子生物学会では近年「理事会における女性理事比率向上のための取り組み」「年会における発表者等の属性調査および年会運営側からのアフターマティブアクションの試み」など、学会の事情に特化した取り組みが奏功してきていることなどから、「学会単体でも発信力のあるアクションが可能な程度の規模を有し、かつ小回りの利くフットワークの軽さといった利点を活かして、学会独自の取り組みにより力を入れることが有効ではないか」との意見が多数ありました。また正式加盟学協会は連絡会運営へのより主体的、積極的な協力が期待されます。研究者である担当委員が、学会独自の課題への取り組みを行い、かつ連絡会の活動に貢献するのに十分なエフォートを配分できるかという点が懸念されました。連絡会では法人整備や運営の合理化・事務作業の省力化が進められていると聞き及んでおります。しかし、120超の加盟学協会の意見のすり合わせをしていくには、少なくとも幹事学会（現在持ち回りとなっている連絡会の事務局担当学会）の事務委託先が決まり、管理運営がある程度軌道に乗った状況が必要ではないかとの見方が大勢でした。

連絡会からの退会は、決して本学会が男女共同参画の問題解決に対して消極的になることを意味するものではありません。これまで取り組みを続けてこられた先達の思いを受け継ぎ、今後も男女共同参画をダイバーシティの一環としてより広範なものとしてとらえ、活動を続けてまいります。

### 3. 大坪久子氏の逝去について

分子生物学会で草創期の男女共同参画活動を牽引してこられた大坪久子氏が、2023年7月30日に逝去されました。分子生物学会で2001年に初めて設置されて以来現在まで続く年会託児室は大坪氏のご尽力によ

るところが大きく、また同氏が中心となって立ち上げられた男女共同参画ワーキンググループは2005年に男女共同参画委員会となり、2013年に発足したキャリアパス委員会へとその流れが受け継がれています。学会ホームページには、大坪氏ご本人からのご寄稿による当時の貴重な活動資料も掲載していますので、ぜひご覧ください。

キャリアパス委員会 委員長 胡桃坂仁志

## キャリアパス委員会 年会企画報告

【Part1 「事前アンケートから考える：人生の選択肢を増やすためのPh.D.】

●日 時：2023年12月6日(水) 12:00~13:15

●会 場：神戸国際会議場3階国際会議室（第10会場）

●参加者数：240名

2023.8.7-28に実施した「人生の選択肢を増やすためのPh.D.」事前アンケートでは662件の回答がありました。ご協力くださった皆様にお礼申し上げます。この事前アンケートでは「学生の時、博士号の価値をどう考えていた（いる）か」「博士課程への進学を考える時、誰の意見を参考にした（する）か」「海外へ行きたいか」「博士号を取得したいか」等を、「博士号取得者」「博士号非取得者」「学生」のカテゴリに分けて調査しました。事前アンケートの設問作成は、当日のパネリストでもある鐘巻将人さんが担当してくれました。

Part1のセッションは当初、事前アンケートの結果を一通り見ていった上でディスカッションに入るような流れをイメージしていましたが、胡桃坂委員長からの「甲斐さんのやりたいようにやってください」という一言により、アンケート結果をもとに座長が特に取り上げたいテーマを順にピックアップしていき、パネリストやフロアの皆さんとガチトークを展開することになりました。テーマは以下の4点です。

1. 博士の学位を持っていて、研究職を得た以外で良かったこと
2. 研究とライフイベントの両立
3. 海外経験について
4. 研究環境は自分で選ぼう

当日のセッションは、実際には以下のように1~3を融合した形で議論が進みました。

- ・日本ではPh.D.の評価が低く、取得するまでの時間や労力、費用に見合わないと感じている人が多い。しかし海外ではPh.D.に対する社会的信用度が高く、Ph.D.があれば現地で職に就ける、良い賃貸物件を紹介してもらえるなど、恩恵を受ける機会が多い。
- ・海外で出産・育児をしながら研究するという道もある。海外では子育てについて周囲からの理解を得られ

やすく、また欧米などでは日本に比べ研究所や大学のサポーティングスタッフの数が多いため、雑用が日本よりも少ないので、子供がいても日本より研究に集中できる。家事代行者やお手伝いさんを雇用して家事をお願いできる国もある。また海外では人材獲得のために研究者カップルと一緒に暮らせる形で雇用されることも多い。日本では夫婦別々のケースが多い。九州大学の配偶者帯同制度なども動きつつあるが、組織レベルで取り組むべき改革であると感じる。なおポストの都合上長年別居の研究者カップルであっても、その形態でワークライフバランスがうまく取れているケースもあり、別居が一概に良い、悪いと言えるものでもない。できるだけ一緒にいたいカップルにとっては、海外は一つの選択肢となりうる。

- ・女性にこそ学位を取ってほしい。学位はライセンス。仮にライフイベントなどで研究を一時離れることがあっても、ライセンスがあればその後のキャリアに道が開けるケースも多い。キャリアを選ぶか、ライフイベントを選ぶかという選択ではなく、両方をあきらめないでほしい。

参加者の方から「大学院は日本と海外どっちがいいでしょうか。」という投稿をいただきました。座長とパネリスト一同からの回答をまとめると以下のような内容でした。

- ・博士号は、できれば早く取れるとその先が楽しい。大学院の情報は現状、海外より日本のほうが詳しく入手しやすいこともあり、日本で良い研究室を見つけてPh.D.を取得してから海外へ行く方がスムーズであることも多い。日本のラボで会得できる研究の作法は将来世界に出てからも役に立つ。
- ・海外では博士学生よりポスドクのほうが留学生を採りやすい枠組みの中にいるという事情もあり、海外へはポスドクになってからのほうが行きやすい傾向にはある。ただし海外では給料をもらいながら博士課程に行けるメリットもあるので、ケースバイケース。しかしPIのグラント事情によっては給与が減額またはなくなるなどの事態も起こりうる。また、人気がある良いラボへの配属は、奨学金をもっている学生と競争になることもあるなど、タフな状況になる可能性についてあらかじめ留意しておくとうい。

海外へ行くとなると「テニユアでPIのポジションを得られない」「日本に帰れない」といったことを心配する人もいます。これについては例えば学術雑誌の編集者など、non-PI研究職以外の職業に転身する人も海外では珍しくありません。Ph.D.を持つ人が政治家になるケースも多いです。日本ではまだわずかながらそのような政治家が出てくるようになった段階です。また日本のグラントシステムは研究の実際を知らない人が中心となって

作り上げてきましたが、こちらもようやく少しずつ博士号を持つ人が官僚や科研費を審査する組織に入っていくつつあります。この流れが進むことで、日本の国策も変わってくるかもしれません。若い世代の人には、まずそうした認識を共有してほしいと思います。

ところで「研究室にこもっていると出会いがない」「女ですが、マッチングアプリで会う人は博士ってなに？なんかすごそうって引かれて終わる。」といったお悩みのコメントもありました。その流れで「『学会でナンパ』もありではないか？」という話題が盛り上がりを見せました。ナンパという表現を不適切に感じる方もおられるかもしれませんが、素晴らしい研究や、その発表をしている人を「かっこいい」「素敵」と思い、自分もそんな研究者になりたいと思うことは、モチベーションとして悪いことではありません。パートナーなどとの出会いに限らず、学会は、自分にとって新しい人的ネットワークを構築する出会いの場でもあります。

最後のテーマ「研究環境は自分で選ぼう」は、事前アンケートに今いるラボの人間関係で悩みを抱えていると思われるコメントが複数あったため、委員会一同から伝えたいメッセージとして取り上げることにしました。入ったラボが自分に合わないと思ったら、ラボを変更して良いのです。ポスドク・スタッフの方は、Ph.D.と経験があるからこそ、より良い環境を求めて動くことができます。またPIは学生を求めており、学生の皆さんには選ぶ権利があります。大学院生であっても、研究室の移動をもっと気楽に考えてみてはいかがでしょうか？ラボ内の人間関係であればまず指導教官の先生に相談をしてください。ラボの先生に相談できないようであれば、研究科や大学の相談窓口などに行ってください。ハッピーにサイエンスができる環境を探してほしいと思います。

(文責：座長・甲斐 歳恵)

## 【Part2「博士についてのお悩み解消！～Ph.D.の価値と可能性について～】

- 日 時：2023年12月7日(木)12:00～13:15
- 会 場：神戸国際会議場3階国際会議室（第10会場）
- 参加者数：230名

博士号は世界的に通用する価値あるものとされる一方で、博士課程進学・博士号取得後のキャリア形成に悩みや不安を抱く人もいます。Part2では具体的に何が博士号取得の障壁になっているのかを聞き、その解消に向けてパネリストや参加者の皆さんからアドバイス、ヒントなどを集め、シェアすることを目的としました。小林武彦氏（東京大学定量生命科学研究所）をお招きし、冒頭に「マルチプレーヤーとしての博士の価値」について講演をいただいでから、パネルディスカッションに移りま

した。

まずは「ライフワークバランス」について。「研究者は非常に多忙で、自分のすべてを犠牲にして研究しなければならない」「競争の場では『研究に全振り』が有利」などのイメージがある人もいと聞きます。パネリストからは以下の意見が集まりました。

- ・研究者に限らず、特にワンオペ育児中でフルタイムとかなれば、忙しいのは皆同じ。働き方や仕事の進め方などを自分でデザインできるところが大きい分、研究者のほうが工夫次第で柔軟にできる点は多いかもしれない。
- ・研究者をしているとハードワークにならざるをえない時もあるが、それが好きなことであれば「好きなことに没頭できる幸せな人生」ととらえることもできる。
- ・ライフイベントは先送りできない。終わりがある。そして最優先しないといけないものである。それができないとすれば社会が悪いが、知恵を絞ってやっていくことになる。
- ・何が一番大切かは人それぞれ。家族がいればライフが一番に来る場面もある。

カップルで一方あるいは双方が研究者の場合、ポストを得るためにパートナーと別居することになる人も多いという話題は前日のPart1にもありました。Part2では「博士号取得後は結婚してパートナーと一緒に暮らしたいのですが、エリアを限定してポストを探すと大変でしょうか」と投稿した参加者がおられました。パネリストからは「ライフがあって研究がある。どちらが重要かは人によって違う。場所で選ぶことも重要」「エリア限定なら全国で見なくて良いので絞りやすい」「求職中であることや興味のある分野などについて色々なところで話していたところ、話が合い求人を出していないラボで雇われた知人のケースもある」などの発言もありました。

博士号によって開ける多様なキャリアパスの可能性についても話題になりました。

その少し手前のところでは「博士に進む前に回り道をした人の事例を知りたいです。修士とって一度社会に出て、やっぱり博士として研究に戻る選択肢も選びやすくなったら、進路選択少しは楽にならないかな」という方もいました。実はこのキャリアパスの方は結構おられます。また博士号取得後に再び企業へ戻って、より広く深く研究開発などに携わる人もいます。社会のニーズを把握した上で基礎研究に臨む視点は非常に有用ですし、ユニークなバックグラウンドは良い意味で目を引きます。「博士→企業→アカデミアは想像できない。」という投稿がありましたが、特に企業とのコネクションや実務経験を重視する私立大学などでは、このキャリアのPIも多いです。就活をすると研究の時間が取られてしまうという面はあるものの「就活も試してみても内定までいただいて、

悩んだ上で研究者になることを決めたなら、納得してがんばられるでしょうし、就活で得られる経験もその後の自分に活かせます」というパネリストの経験談もありました。

経済面についての不安の声もあります。博士課程の学費などについては以前に比べて公的サポートも手厚くなりつつありますが、まだまだ足りないのが現状です。これには制度面の見直しを求める継続的な働きかけが大切で、学会としてもこつこつと活動を続けています。出産・育児に関する補助制度は以前に比べ充実してきているので、費用を低く抑えてベビーシッターなどを利用することもできます。研究者の家族まで含めてサポートする公的制度はまだあまり聞きませんが、「ケイロン・イニシアチブ」などNPO法人でそのような活動をしている団体はあるので、お困りの方はぜひ調べてみてください。

ロールモデルについても話題になりました。私の恩師・相賀裕美子先生はとてもかっこいい方で、「あなたがハッピーでないと！」と言われたことがあります。何より、ご自身がいつも楽しそうでした。ちなみに胡桃坂委員長が今回小林氏に講演を依頼した理由もまた「どれだけ好きなことをやって楽しそうに生きているか、見てほしいから」とのことです。その小林氏がフル活用している博士号とは、ご本人によると「知的好奇心を最大限発揮できる、人間の存在に関わる重要なことができるライセンス」とのことです。

このように明確なロールモデルがいても良いですし、誰か一人ではなく、遠い存在である高名な先生のあんなところ、すぐ近くにいる同級生のこんなところが良いというふうに、いいとこ取りをするのも手です。これはラボ選びについても言えることで、ラボにはそれぞれ違っ

た色や独自のスタイルがあるので、複数のラボを経験してみてもその「いいとこ」を蓄積していくというのも良いと思います。

博士号を取得して研究者をしている人々を見ると、皆さん「研究が好きでパッションがある人」です。

学生の皆さんに伝えたいのは、「学生の間に面白いこと、楽しいことをたくさん経験して、情熱を注ぎ続けることのできる好きなことを見つけてほしい。その情熱を活かす場はアカデミアでも企業でも良い。何かイベントが生じた時に乗り越えていける力にしてほしい」ということです。

研究が好きで、研究を続けることに興味がある人には、「やる気軸」と「能力軸」のうち後者が無いと思って諦めるケースがありますが、指導する側から見ると、やる気のある人のほうが伸びる傾向にあります。やる気が持続するなら、能力は後からついてきます。ポイントは、指示を待つのではなく、やりたい、知りたいと思うことについて自分で考えて動くこと。研究に必要な人とのコミュニケーションや人前で話すことが苦手という人は、場数を踏めばできるようになります。後悔しないよう、やりたいと思った時には自分の心の声に忠実に動いてください。

(文責：座長・佐田 亜衣子)

※事前アンケートの結果やセッション中に「Slido」で参加者からいただいたコメントは学会ホームページに公開しています。

<https://www.mbsj.jp/admins/committee/careerpath/annualmeeting.html>